四十—四十二【とは】汝をこゝに見るを得るは

四十三—五　その何人なるやは姿を見て知るをえざりしも聲をきゝて知るをえたり

四十六—八【火花】聲

【フオレーゼ】フオレーゼ・ドナーチ（一二九六年七月死）。ヒレンツエの人にてダンテの妻ゼムマの遠緣にあたれり、そのダンテと往復せる短詩（合せて六篇）ムーアの「ダンテ全集」（百七十九—百八十頁）にいづ、詩中にビッチ・ノエルロとあるは即彼の異名なり

六十一—三【永遠の思量】天意

七十三—五　神の義に從ひ神と和するの願あるによりて基督は我等のためによろこびて十字架にかゝりたまへり、我等もまた此願あればよろこびて木の下を過ぐ

【エリ】エリ、エリ、ラムマ、サバクタニ（わが神わが神何ぞ我を棄てたまへるや）。十字架上の基督の叫（聖マタイ傳廿七の四十六）にしてその苦最も大なりし時をあらはす

七十九—八十一　若し罪を犯す館はざるにいたりて、換言すれば死に臨みて、はじめて悔い改めしならば何ぞ淨火の門外にとゞまらずして

【嫁がしむる】歸らしむる

【善き愛】改悔

八十二—四【時の時を補ふ】死に臨みて悔ゆる者その世に享けし齡と同じ年數を淨火の門外に過ごすこと（後、四の百卅以下及十一の百卅七以下參照）

八十五—七　わが妻ネルラわがために嘆き且祈れるによりて我はかく速かにこゝにわが罪を淨むるをえたり

【甘き茵蓐】うれしき苦

八十八—九十【山の腰】門外の淨火。魂この處にて門内に入るの時到るを待つ

【他の諸の圍】この下の五圍

九十四—六【ベルベジア】サールデニア島の一山地にて中古蠻民住み風紀紊れし處なりといふ

【ベルベジアより】トスカナのベルベジアともいふべきヒレンツエより

九十七—九【今を昔となさざる】今より遠からざる

百—百〇二　風紀興振の命寺院より出でしをいふ、されどいづれの時の事を指せるや不明なり

百〇三—五【「サラチーノ」】異教徒

【聖または】寺院の禁制または法律上の制裁なきため

百〇六—八【彼等のために儲ふるもの】彼等の上にくだす禍。千三百年以後、種々の災害ヒレンツエに起れること當時の記錄に殘れども特にその中のいづれを指していへるやは知りがたし

百〇九—十一【ナンナ】nanna 母や子守等が嬰兒を眠らしめんとて ninna nanna ニンナ、ナンナとうたふ歌

百十二—四【日を】これらの魂昔汝の影を見て生者のこゝにあるをあやしむ

百十五—七【汝と我と】ダンテがフオレーゼと共に地上の樂を求めしこと

百十八—廿三【往日】四月八日。今は十二日なり

【姉妹】日（アポルロ）の姉妹なる月（ヂアーナ）

【圍く】七日の夜の滿月（地、廿七參照）

百廿一—三【闇けし夜】地獄の闇（後、三十五參照）

【まことの死者】肉體を失ひ且また神の恩惠を失へる者

百廿七—九【いふ】地、一の百十二以下參照

第二十四曲

ダンテなほフオレーゼとかたり、その多くの侶の名とその豫言を聞きて後、二詩人とともに第二の果樹のほとりにいたりて食慾の罪の罰せられし例をきゝ、さらに進みて第七圍に通ずる階（きざはし）の下に達す

四—六【再び死し】死後魂いたく痩せ衰へてあるかなきかのさまなるをいふ

【目の坎】深く窪める眼

七—九【彼若し】前曲の終の詞を次ぎていへり。スターチオもし獨ならばなほ速かに歩むべきも、ボルジリオと共に旅せんとて恐くはその足をおそくするならむ

十—十二【ピッカルダ】フオレーゼの姉妹

十三—五【オリムポ】希臘のテッサリアにある山にて神話の神々の住むところ、轉じて天。ピッカルダは月天にあり（天、三の冊四以下參照）

十六—八【我等の袭】儀ゑてやつれてありし日の面影なければ、みる目に誰と知りがたし

十九—廿一【ボナジュンタ】ボナジュンタ・オルビッチアーニ・デーリ・オゼラルヂ。ルッカの人（十三世紀の後半）にてシチーリア派の詩人なり（「ダ、ウルガリ、エロルダ」一の十三參照）

廿二—四【寺院を】寺院を抱くは寺院の夫即ち法王（地、十九の在十五—七參照）となるをいふ、法王マルチーノ第四世を指す、千二百八十一年選ばれて法王となり千二百八十五年に死す

【トルソ】巴里の西南にある町。マルチーノはトルソに生れしにあらざれども此地の寺院に僧官たりし佛人なれば斯く

【ボルセーナ】ギテルボの北にある湖水。古註曰、マルチーノ第四世は極めて口腹の慾を恣にせる人にて就中ボルセーナ產の鰻を好み之をヴルナッチヤ酒（味醂の類）に醉はしめて後燒きて喰へりと

廿八—卅【ウバルヂーノ・ダルラ・ビーラ】（ムゼルロなるビーラ城の名をとれり）カルヂナレ、オッタギアーノ（地、十八—廿十の百）の兄弟にしてピサの大僧正ルッジエーリ（地、昔三十三—五）の父なりといふ

【ボニフアチオ】ボニフアチオ・デイ・ヒエースキ。千二百七十四年より同九十五年までラヱンナの大僧正たりし者

卅一—三【マルケーゼ】フオルリの名族、十三世紀の後半の人

【便宜】フオルリの美酒を指す

卅七—九【ところ】口の中、即ち饑渴の苦を最も切に感ずるところ

【ゼンツツカ】四十三行以下にいへる女の名

四十三—五【女】ゼンツツカの事傳はらず、千三百十四五年の頃ダンテルツカに赴きしことあればその時此婦人にあひてその特に賞讃すべき者なるを知れるなるべし

【未だ首帕を】未だ嫁せず（千三百年には、嫁したる者帕をもてその面をおほへばなり

【誹るとも】腐敗せるルッカの町（地、廿一の冊七—四十三參照）も猶かの女ありてダンテの心を慰むるに足る

四十九—五十一【新しき詩】十三世紀の後半に於ける伊太利の二大詩派即（一）シチーリア派とプロヱンツア派を模せるもの及（二）敎訓派とて推理に傾けるものに對していへり

【戀を知る】Donne ch'avete intelletto d'Amore「新生」にいづる第一カンツオネの起句

五十五—七【公の證人】ヤーコポ・ダ・レンチニ。十三世紀の前半の人にてシチーリア派の詩人なり

【グイットネ】グイットネ・デル・ギーヂ（一二九四年死）。アレッツオの人、敎訓派の詩人にしてフラーテ・ゴデンテ（地、廿三の百〇三參照）たり（「ダ、ウルガリ・エロルエンチアニ、大の八十五以下參照）

【節】障碍、即ち彼等をして新しき詩風に到達せしめざる

五十八—六十【汝等】汝等ヒレンツエ新詩派の人々

【口授者】愛。內部にひゞく愛の聲をそのまゝ歌となすをいふ

六十一—三　新舊二派の詩風の相違を此事以外に求めんとすとも得べからず

六十四—六【ニーロ】埃及のナイル川

【島】鵠

六十七—九【顧】罪を淨めんとの

七十三—五【聖なる群】罪を淨むる魂の群

七十六—八【いつまで】わがいつまで世に生

くるやは我知らず、されど鄉土ヒレンツエの禍を見ることなからんため一日も早く淨火の岸に歸るをねがへば、わが希ふ如く早くは死して世を去る能はざるべし

八十二—四【罪の最も大なるもの】フオレーゼ自身の兄弟なるコルソ・ドナーチを指す。コルソは黑黨の首領にしてヒレンツエの禍亂を醸せるもの、千三百〇八年反逆の罪に問はれて此町を逃げ出でしかど馬より落ちて敵に殺さる

【淡】地獄

八十五—七　ダンテの記事に從へばコルソはその乘馬に踏み殺されしなり

八十八—九十【これらの輪未だ】未だ多くの年過ぎぬまに。輪は天球

九十一—三【王國】淨火

九十七—九【軍帥】師

百—百〇二【わが目の】我のあきらかに其姿を見る能はざること恰もあきらかにその瞭言をきとる能はざるに似たり

百〇三—五【めぐれる】まがれる路を

百〇六—十一【民】多食の罪を淨むる民

【罪なき】vani（空しき望にあやまるゝ）

百十五—七【エーヴのくらへる木】善惡を知るの木（創世記二の九及十七の）、エーヴ蛇に欺かれてその果を喰へり（同、三の六）

【この上に】淨火の山巔即ち樂園に（淨七、廿二の廿七以下）

【かの樹より】最初の罪最初の罰の記念なる知識の木の芽より此木出でゝかの木と同じく食慾をうながしかつ過食の罪の罰を告ぐ

百十八—廿【岸の邊】木の左即岩壁に近きところ

百廿一—三　罰の第一例、チエンタウロ

【詛の子等】チエンタウロ（地、十二の五十五—七註參照）。神話によればイツシオネと雲との間に生る、嘗てラピチ人の王ピリトーとイツポダーミアとの婚筵の席に招かれしが酒に醉ひて狼藉に及びテセオ及その他の人々と戰ひて多くの之に死せり（地、十二の七十一—七十二註參照）

【二重の】人と馬と（地、十二の八十二—四註參照）

百廿四—六　第二例、ゼデオネ（ギデオン）に從て勝利の參をわかつ能はざりし希伯來人（士師記七の四以下）

【貪り飲みしため】原、飲むにあたりて己の弱きを示せるため。即慾を制する能はざるため膝を折り屈みて水を飲めるをいふ（士師記七の六）

百廿七—九【緣の一】路の左側

百廿—卅二【寬に】木を避けんとて互に身を寄せたりしも今は木の下を離れたれば身自由なり

百卅三—五【おちおそるゝ】或は休める（或は、刷れざる）歌のおそるゝ

百卅六—四十一【ひとりの者】天使

【折れよ】左に

百四十二—四【あたかも】目にて行手を見る能はざる人、犂をふるべに進むごとく。二詩人と並びて歩みゐたるダンテは天使の光を避けんとて彼等の後よりゆき天使の犂または此二詩人の足音をふるべとなせるをいふ

百四十八—五十【羽】天使羽をもてダンテを扇ぎてその額の上なるP字の一を削り去ること前の如し

【アムブロージヤ】神々の食料（神話）

百五十一—四【福なり】義に飢ゑ渴く者は福なり（馬太傳五の六）といへる聖句の中渴くを第五圈の頌詠とし饑うを第六圈の頌詠とせり、またこゝにては食慾の罪に適合せしめんため此句を自由に變術せるなり（淨、廿二の廿六註參照）

第二十五曲

階を踏みて登る道すがら、スターチオはボルジリオの請に應じてダンテのために生殖の作用、靈肉の結合、及死後に於ける靈の狀態を論じ、かくて相共に第七圈に達すれば色慾の罪を淨むる一群の魂焰に包まれつゝ聖歌をうたひ且貞節の例を誦す

一—三【日は】白羊宮にある太陽既に傾きて子午線を離れ金牛宮の星之に代る、金牛宮は白羊宮に次ぐ天の十二宮の一なれば時は今午後（四月十二日）二時の頃なりと知るべし

【夜】日と反對の天に於ては天秤宮にある夜（註、二の四六註參照）ゼルサレムメの子午線を離れ天秤に次ぐ天の十二宮の一なる天蠍宮の星之に代る（即午前二時の頃）

十三—五【消え】詩人等を果はすことを恐るゝため

十九—廿一【滋養を】肉體の營養をうくる必要なき魂（第六圏の）の捜するをあやしみてかくいへり

廿二—四【メレアグロ】カレドニア王オエネオとアルテアの間の子、その生れし時定命の三神一木片を火に投じ、生兒の命數此木とともに盡くべしといひて去れり、アルテア直ちに火を消してかの木片を秘藏せしかど メレアグロ成人の後二人の叔父を殺せしかば 再び之を火に投じてその兄弟のために仇を返せり（オヰデオの「メタモルフオジ」八の二百六十以下參照）。營養以外に人身を左右するの力あるをいふ

廿五—七 見ゆる魂は見えざる魂の鏡なるをいふ。硬きは解し難きなり軟きは解し易きなり

廿八—卅【望むがまゝに】或は、汝の望に關して

【傷を癒さしむ】疑を解かしむ。人の靈性の狀態を論ずるは教理に關することなればギルジリオは之をもて基督教徒の詩人スターチオに委ねるを善しとせり

卅一—三【常世の狀態】la veduta eterna 死後に於ける魂の狀態

異本、la vendetta eterna（永遠の刑罰、若くは永遠の存在者即神の刑罰）

卅七—九【完全】完全なる血は精液となる血をいふ。營養に必要なる血の如くに血脈を循環せざるもの

四十三—五【自然の器】子宮。こゝにて女性の血液と合す

四十六—八【堪ふる】作用を受くる（男の血の）

【行ふ】作用を與ふる（女の血に）。出る處は心臟なり

五十二—四　此一聯及以下の各聯に於てダンテはトムマーゾ・ダクイーノ（天、十の九十七—九註參照）の神學要論（Summa Theologica）の說に基づきスターチオの口を藉りて胎子の植物性（成長）より動物性（感觸）に進み さらに人間性（理智）に到達する次第を陳ぶ

【活動の力】男性の血の中なる

【異なるところ】草木の魂は生育を限度としてそれ以上に進む能はざれども 人間の魂はさらに進んで他の性を備ふ、前者は既に發達の彼岸に達し後者はなほその道程にあり

五十五—七【海の菌】海中の下等動物。動物性の初期に於てはその物 未だ各種の官能を具備するにいたらずしてたゞ動き且感ずるのみ

五十八—六十　血が心臟内に得たる肢體構成の力は今や既に弘がりて胎兒の各部 各機官に及ぶ

六十一—三【人間】fanto（物言ふ者の義）理性を備ふる者

【さとかりし者】註釋者曰、ダンテはこゝにアエルロイ（百四十四）を指してかくいへりと

六十四—六　視るに目あり聽くに耳あるごとく理性に 特殊の機官あるにあらざるがゆゑに彼此理性を人の魂より分離したり、されど個性を備へずして普遍に存在する理性 人の生るゝと共に之と合ひ 人の死するとともに之と離るゝものなりとせば これ死後個人の魂の存在するを認めざるに等し

【靜智】possibile intelletto

アリストーテレ（アエルロイの註による）の區分せる智に二あり、一を靜智（intelletto passivo）一を動智（intelletto attivo）といふ、人は靜智即ち所謂possibile intelletto によりて外部の印象を受け動智によりて件の印象を理解し諸の觀念を

構成するにいたる、動智は分離す無情にして不死なり、靜智は死滅す而して動智を缺くを許さず。その言に曰く、眞の智は分離の智なり、此の智獨り永久不死なりと。アヱルロイ此說によりて謂へらく、動智は分たれず個性なし、その個人と合するは輔助的にして構成的に非ずと、こは實に個人の魂の不滅を否定するに近し、ダンテは誤りてアヱルロイ靜智を魂より分離せりと思へるに似たり、アヱルロイの離合を云々せるはまことは動智のことなるを（ノルトン）

七十—七十二【發動者】神。植物動物の二性は生殖の自然の作用より成る、ひとり理性は神が直接に人間に賦與したまふ靈なり

七十三—五　新しき靈は既に胎兒の中にはたらきつゝある植物動物の二魂を己と合して一魂となし三性を兼備ふるにいたる

【且生き】生は植物性に屬し感は動物性に屬し自覺（自ら己をめぐる）は人間性に屬す

七十九—八十一【ラケージ】定命を司どる三神の一（地、五—七註參照）。その絲盡くる時とは人死する時をいふ

【人と神と】人に屬するものは肉體に屬する能力、神に屬するものは天賦の靈能なり

八十二—四　肉に屬する能力（感觸）は死と共にその機官を失ふが故にひそみて働をとゞめ、靈に屬する能力は肉の羈絆を脫するがゆゑに却ていよ〳〵活動す

八十五—七【岸の一】罰せらるゝ魂はアケロンテの岸に（地、三の七十以下）、救はるゝ魂はテーヱレの岸に（淨、二の百以下）

【路】地獄か淨火か

八十八—九十【構成の力】魂の中なる構成の力（四十一—四十二行）は周圍の空氣にその作用を及ぼしその及ぼす狀態並に程度はあたかも生時肉體の上にその作用を及ぼせると同じ、換言すれば魂はその周圍の空氣をもて生時と同樣の形狀を構成す

九十一—三【日の】原、他の者の。日光雨滴に映じて虹生ずるごとく

百—百〇二【之】空氣より成れる新しき體

【影】ombra 又亡靈の義あればなり

百〇六—八【あやしとする事】第六圈の魂の痩すること

百〇九—十一【最後の曲路】第七圈。但 ultima tortura を最後の苛責と解する人あり

百十二—四　左側の岩壁より火焰噴出すれば右側の緣よりは風起りて此火焰を追返し、緣に沿ひて一條の徑路をひらけり

【そこに一の】或は、之（火焰）に己（緣）を離れ去らしむ

百廿一—三【こよなき憐憫の神】Summae Deus clementiae 寺院にて土曜日の朝の禮拜にうたふ讃歌の起句にして貞節を祈り求むる詞此歌の中にあり

百廿七—九　貞節の第一例、聖母

【われ夫を知らず】天使ガブリエレに答へたる處女マリアの詞（路加傳一の廿四）

百卅—卅二　第二例、ヂアーナ。ヂアーナはジオヱとラートナの間に生れし獵の處女神なり

【とゞまり】異本、走り

【エリーチエ】ヂアーナに事へたる女神（ニンファ）の一。ジオヱの辱をうけて森より逐はる（オヰヂオの「メタモルフオシ」二の四百〇一以下參照）

【ゼーネレ】戀の女神。こゝにては色慾

百卅六—九【かゝる】かく聖歌をうたひかつ淑德の例を唱ふるによりてつひにその罪清まるにいたる

【その傷つひに】la piaga dassezzo 或は、最後の傷（即最後の圈に淨めらるゝ罪）と解する人あり

第二十六曲

ダンテ兩詩人と俱になほ第七圈にありてグイード・ダイコッエルリ及アルナルド・ダニエ

ルロと語る

一—三【誠】淨、廿五の百十八—廿參照

四—六【日】四月十二日の夕陽

七—九【表徵】ダンテの影の落つるところ焔いよ〳〵赤く見ゆ、身に影あるは生者のまるしなり

十三—五　色慾の罪を淨むる魂焔の外に出ゞるをえず

十六—八【湯】ダンテの生者なりや否やを知らんとするの願

十九—廿一【エチオピア】埃及の南にある國。印度と同じく熱帶に屬す

廿八—卅　邪淫の罪人二群に分たる、一は淫慾を恣にせる者にて詩人等と方向を同うし一は自然に背ける者（男色）にて之と反對の方向に進む、二群相會ふとき彼と此と互に接吻してまかして直ちにわかるゝなり

卅四—六【路と幸】路のよしあし食物の有無を互に尋ねんためなるべし

四十—四十二【ソッドマ、ゴモルラ】罪惡（殊に男色の罪）大なるによりて天火に燒かれし（創世記、十八の廿及十九の廿四—五）パレスチーナの町の名、邪淫の罰の第一例

【パシフエ】第二例（地、十二の十五並註參照）

四十三—五　ありうべからざることを假定していへり

【リフエ】古歐洲の北部にありといはれし連山

【砂地】リビアの沙漠

四十六—八【歌】淨、廿五の百廿一—三參照

【叫】貞節の例（淨、廿七以下參照）

四十九—五十一【請へる】十三行以下

五十五—七　熱める身を世に殘すは老いて後死せるにいひ、熱まざる身を世に殘すは若くして死せるにいふ

五十八—六十【淑女】聖母マリア。マリア人類のために上帝に請ふ（地、二の九下參照）

六十一—三【天】エムピレオの天

七十三—五【生を善くせんとて】神の恩寵の中に生きんとて。異本、死を善くせんとて

七十六—八【チエーザレ】ガルリアより凱旋せるチエーザレ（シーザー）にむかひて羅馬の兵士等、チエーザレガルリアを從へニコメーデチエーザレを從へり云々と歌ひチエーザレとビチニア（小亞細亞の）王ニコメーデと不自然の關係あるを嘲りたりとの傳說によれるなり

七十九—八十一【恥をもて】かく己が罪をいひあらはし自ら責めて焔と共に罪を淨む

八十二—四【異性】原文、ふたなり二形。男色に對して異性間の淫行をいふ

八十五—七【板】即模擬の牝牛（地、十二の十五）

【女】パシフエ

九十一—三【グイード・グイニツエルリ】有名なる伊太利詩人にてダンテ以前第一と稱せらる、ボローニアの人（十三世紀、但生死の年並事蹟不詳）

九十四—九【リクルゴの憂】ネメア王リクルゴの婢イシヒレテーベ攻圍の諸王にランジアの泉のある處を敎へんとて（淨、廿二の百十三參照）行きたる間に草の上に殘されしリクルゴの幼兒蛇に嚙まれて死せしかば王憂へ且怒りて將さにその婢を殺さんとす、イシヒレの二子トアンテ、エウネオその己が母なるを知り走りゆきてこれを救ふ、ダンテは再母にあへる子の喜を再かの詩人にあへる己が喜にたとへしなり

イシヒレの物語はスターチオの「テーベの歌」第五卷にいづといふ

【されど】イシヒレの子等は走り進みてその母を抱けるも我は敬てグイードを抱かず

百〇六—八【開けること】神恩によりて生きながら冥界を過行くこと（五十五—六十行）

【レーテ】忘却の川（淨、廿八の廿五以下參照）

百十二—四【近世の習】俗語を用ゐて詩を作ること（新生廿五の廿二以下參照）

百十五—七【一の靈】アルナルド・ダニエルロ。プロヴンツアのトロヴトリ派の詩人、十二世紀の後半の人、其名聲詩の實質よりもダンテ

の讃辭に負ふところ多しといふ

百十八—廿【レモゼスの人】ジラルド・デ・ボルネル。レモゼス（佛）の詩人（一二二〇年頃死）

百廿四—六【グイットネ】グイットネ・デル・ギーゾ（淨、廿四の五十五—七註參照）

【多くの人】世評に盲從してグイットネを激稱することの誤なるを見し人々

百廿七—九【僧院】天堂。基督こゝに諸聖徒の長たり

百卅—卅二【パーテルノストロ】paternostro（我等の父）基督の敎へたまへる基督徒の祈（馬太傳六の九以下及路加傳十一の二以下）

【但し】主の祈の中、我等を誘惑に遇はせず惡より拯ひ出し給へといふ最後の祈は淨火門內の魂に必要なきなり（淨、十一—四參照の廿）

百卅六—八【指示されし】百十五—七行

【わが願】わが心よろこびて彼の名を迎ふと告ぐれば、わが彼の名を聞くの願の切なるを告ぐれば

百卅九—四十七　原文にてはアルナルドの答みなその國語なるプロヴェンツアの語にてふるさる

【この階の頂】即ち淨火の山巔

【權能】神の

【憶へ】憶ひ出でゝわがために祈れ

第二十七曲

詩人等猛火の中を過ぎて階を登るに闇既に地上をつゝみて登り終ること能はず、みな階上に臥して天明を待つ、ダンテは夢にリーアを見、夜のあくるに及びて二詩人と俱に地上の樂園に到りこゝにギルジリオの最後の言を聞く

一—六　日沒近き時（四月十二日）を叙せり、淨火の日沒はゼルサレムメの日出印度の正午西班牙の夜半にあたる

【ところ】聖都ゼルサレムメ。太陽其他萬物の造主なる（約翰傳一の三參照）基督が十字架にかゝり給ひしところ

【エブロ】西班牙の川の名

【天秤】日白羊宮にあるがゆゑに夜（即夜半）は天秤宮にあり

【ガンジエ】印度の川の名（淨、二の四六註參照）

七—九【心の淸き者】馬太傳五の八

十—十五【かなた】火のかなたにうたふ他の天使の歌（五十五—六十行參照）

【穴に埋けらるゝ人】生埋にせらるゝ罪人（地、十九の四十九—五十一參照）

十六—八【人の體】火刑に行はるゝ罪人の體なるべし

廿二—四【ジエリオネ】ジエリオネの背に跨りて第七獄より第八獄にくだれる時（地、十七の七十九以下參照）

卅一—三【良心】師の言に從へと命ずる

卅四—六【壁】二人の間を隔つるもの即火

卅七—九　ピラーモとチスベはベビローニアの若き男女なり、互に深く愛せしかどその親結婚を許さゞりしかば、ひそかに相謀り、家をいでゝ一大桑樹の下に會はんと約し、夜に入りて後チスベまづかしこに到る、會獲物を喰へる一匹の獅子の水を飲まんとて來れるあり、チスベ月光によりてはるかに之を見走りて一洞窟の中に避け獅子はチスベの地に落せし面帕をかみて去れり、後て來るピラーモ猛獸の足跡と血の附着せる面帕を見てチスベ既に殺さるとおもひ刀を拔いて自刄す、血高く飛びて桑樹に及びその白色の實深紅に變ず、洞窟より出來るチスベこの狀を見るやその戀人の刀をとりてまた之に死す、爾後桑樹常に深紅の實を結ぶにいたれりといふ（メタモルフオシス四の五十五以下參照）

【目を開きて】洞窟より歸れるチスベ自刄せるピラーモを見てまづ名をその名を呼びまた己が名を之に告ぐればピラーモチスベの名をきくに及び瀕死の目をひらきてその戀人を見やがて再び之を閉ぢたり

四十三—五【一の果實に負くる】一個の果實に誘はれて先に爲さゞりし事をも爲さんとする

四十六—八【わかてる】此時まではギルジリオ最初にスターチオ中にダンテ最後になりゐたり

四十九—五十一【着え立つ】火に溶けし。地上最熱しとなすものといふともかの火にくらぶれば冷水の如し

五十八—六十【我父に】基督の言（馬太傳廿五の卅四）

【わが目をまばゆうし】原文、我に勝ち

六十四—六【我は】日光身に遮られて影その前にあらはれしをいふ

七十—七十二【一の色と】一面に暗く

【夜】夜の闇あまねく天を蔽はざるまに

或は。夜その處（天）をことゞく占め終らざるまに

七十三—五【山の性】この山の特性により、夜登らんと欲するも能はざるをいふ（淨、七の四十以下參照）

八十八—九十【星】（複數）、註釋者曰、燦かなるは空清ければなり、大なるはこの處天に近ければなりと

九十一—三【我かくにれがみ】見來りしことどもを回想するなり

【即ち事を】曉方の夢ふば〳〵未來の出來事を告ぐ（地、廿六の七十二並註參照）

九十四—六　明近き頃を指す

【チテレア】ゼーネレ即明の明星

ゼーネレ（戀の女神）はイオニア海中の一島チテレア（今のチエリゴ）に住みしことあるによりてこの異名を得たるなり

百—百〇二【リーア】ラバーノの長女（創世紀廿九の十六以下）。活動の生を代表す。花圈を造りて身を飾るは善行によりて德を積むなり

地上の樂園は人生至上の幸福を表示す、ふかしてこの幸福は人間各自の德の活動に外ならず（ヴ・ガ・ナルキア三、十六の四十三以下參照）

百〇三—五【鏡】聖徒の魂の鏡なる神

【ラケーレ】ラバーノの次女（創世記廿九の十六以下）。默想の生を代表す。人間の生活を實行と冥想の二生に分ちリーア及ラケーレを之が象徴となすこと當時の教理に見ゆ

百〇六—八【美しき目を】己を神の鏡に映して神のたへなるみわざを思ひめぐらすなり

百〇九—十一　遠國の旅果てゝ歸る人わが家に近づくに從ひ歸思いよ〳〵切にして夜のあくるを待ちわぶ

【曉の光】splendori antelucani　日出前の光明

百十五—七　ダンテがこの日地上の樂園にいたるをうるを告ぐ。行く道各異なれども人皆人生の眞の幸福を求む、汝の願今日成就し汝は地上の樂園に到りてこの幸福をうくるをうべし

百十八—廿【賜】或は、ふらせ

百廿七—九【火】一時の火は淨火の苦、時至れば止む。永久の火は地獄の苦、永劫に亘りて盡くることなし

【わが目ら】理性は人を導いて現世の幸福に到達せしむることをうれども すでに此境に到達しさらに進んで永遠の幸福を享受せんと欲するものを導くをえず、これ信仰に屬することは天啓によらざれば知る能はざればなり

百卅三—五【日】四月十三日の旭日

【おのづから】種を要せずして（淨、廿八の六十七—九）

百卅六—八【目】ベアトリーチエの（地、二の廿五—七參照）

百四十二　人罪を離れ、己が好むところに從て而して誤ることなく、その思その行よく正義に合するにいたれば、既に現世の羈絆を脱して自由自主の境界にあり、かゝる人はもはや理性の導者を要せずたゞその羨ひ來れる力を活用し天啓の助によりて進んで永遠の幸福を求むべきなり

【冠と帽】古、法王が帝王の首に冠と帽とを俱に戴かしめしことあるによりてギルジリオはダンテにその自主の權を認むることを告げしなり

第二十八曲

ダンテ樂園に入り、レーテの川のかなたの岸に花を摘む一佳人を見、これとかたりてその數を聞く

一—三【林】地上の樂園。昔寺院の説に地球の東最高の山の巔にありとなせるもの、これを淨火の山上に置くはダンテの創意にいづ（研究篇三卷百三十四頁以下參照）（ムーアのダンテ）

四—六【岸】山頂の外側即詩人等が階を登り終れるところ

十—十二【方】西方即淨火の山がその朝影をうつす方

十六—廿一【エオロ】風の神。鎖をもて諸の風を大なる岩窟の中に繫ぎおき、時に應じて之を海陸に放つ。「エーネアの歌」にジュノネ神がかの岩窟に赴きてエオロに風を乞へることみゆ（一の五十以下）

【シロッコ】東南の風

【キアッシ】アドリアチコの海濱ラヴェンナに近き舊城市の名、大なる松の林このあたりにあり

廿五—七【流】レーテ

廿八—卅三【蔭】林の木蔭

四十—四十二【淑女】名をマテルダといふ（後、卅三。の百十九）かの階上の夢の中なるリーアの實現にして活動の生を代表す、されどその名の由來については定かなること知りがたし

四十三—八【愛】神の愛

四十九—五十一【プロセルピーナ】魔王プルトネに奪はれてその妻となれるもの（オヰヂオの「メタモルフオシ」五の三百八十五以下參照）

【その母】チエーレレ

【奪を失へる】摘み採りし花を失へるをいふ。プロセルピーナがプルトネにとらはれしときその摘める花を失ひて悲みしこと「メタモルフオシ」（五の三百九十八以下）に見ゆ

【いづこに】花咲く林に

【いかなるさま】若き美しき姿

五十二—四　舞姫の舞ひ進むときその兩足殆んど地を離れずまた相前後せざるごとくなるをいへり

六十四—六　戀の女神　ゼーネレが自ら戀に陷りし時といふともその目の光かくあざやかならざりしなるべし

【子】クーピド。戀の神、戀の矢を放ちて神々または人間の心を貫くもの

【あやまちて】原文、子の習に背きて。即誤りて矢を射ることなきクーピドがかつてその母ゼーネレに接吻せんとてあやまりてその胸に矢疵を負はせ、ゼーネレこの疵のためにアドネを慕ふにいたれるをいふ（「メタモルフオシ」十の五百廿五以下參照）

六十七—九【右の岸】原文、右の對岸

七十—七十二【セルゼ】（ゼルクセス）、波斯王ダーリオの子、紀元前四百八十年大軍を率ゐ船橋を造りてエルレスポンド（即ダルダネルリの海峽）を渡り以て希臘を征服せんとせしかどサラミナの戰に大敗し汚名を殘して故國に歸れり

七十三—五【レアンドロ】アビード（亞細亞側なるエルレスポンド沿岸の町、セルゼの船橋を裝へるもこの處なり）の一青年、對岸の町セストに住めるエーロを慕ひ夜毎に海を泳ぎ渡りてこれを訪ふ、されど一夜波荒く、かの地に達するあたはずして死す

【開かざりし】紅海の水の如く（出埃及記十四の廿一以下）左右に分れて路を與へざりしをいふ

七十六—八【巢】住むところ（九十一（三行參照））

七十九—八十一【汝我を】詩篇九十二の四に曰、主よ汝みわざをもて我を樂ませ給へり、我聖手のわざを歌ばん。マテルダは樂園の中にあらはるゝ神の奇しきみわざをよろこびてほゝゑめるなり

八十二—四【先に】ダンテ今は二詩人の先に立てり（百四十五（七行參照））

八十五—七　ダンテはさきにスターチオより淨火門内には風雨霜雪の異變なきよしを聞きて

（四十三以下）その眞なるを疑はざりしに今現に地上の樂園に風あり河あるをみてあやしめるなり

九十一—三【至上の善】神。完全なる者神のみなれば、よく聖旨に適ふ者 神の外にあることなし

【限なき平和の】やがて天上の限なき福を享けしむべき

九十四—六 始祖罪を犯して樂園より逐はれしをいふ（創世記三の一以下）

九十七—九 水陸より發する一種の氣あり、太陽の熱度に應じ之に向ひて上昇す、門外の淨火及人の世に風雨霜雪の變を起すもの 即この氣なり

百—百〇二【鎖さるゝところ】淨火の門。風雨の異變門内に及ばず、これ地氣のこれより高く昇るあたはざるによる

以上スターチオの言の眞なるを證す

百〇三—五 以下地上の樂園に風あるの理を示す

【第一の回轉】第九天、プリーモ・モービレ（第一動）と稱す。當時の天文によれば他の天球皆之に從ひ 東より西に向ひて廻轉す空氣亦然り、ふかして地球は 宇宙の中心にありて動かざるがゆゑに氣壓の變化なき處にては たえず微風の東より西に吹くあり

百〇六—八【純なる】原文、生くる

【絆なき】氣壓の作用をうけざる

百〇九—十一 草木風にあたれば各その自然に有する繁殖の力を風に滿たし この風之を下方におくる

百十二—四【かなたの地】人の住む地。地質と氣候に應じて風の散らせし力を受く

百十八—廿【一切の種】各種の草木

百廿一—六 以下樂園に水あるの理を說く。世の水脈は濕氣の冷却して 水となれるものに補はるゝがゆゑに これより流れいづる河或は溢れ或は涸るゝことあれども 樂園の河は神の直接に造りたまふ水より成り たえず聖旨によつて補はるゝがゆゑにかゝることなし

百廿七—九 樂園の水一の泉よりいで、二の川となりて左右に流る、其一は レーテといひて罪業を忘却せしむる力を有し 他はエウノエ（淨、廿三の百廿七以下）といひて善行を想起せしむる力を有す

百卅—卅二【まづ味はれ】人まづこの二の河水を味はざれば その功德をうけて天に登ることあたはず、即人罪を忘れ 德を憶ふにあらざれば不朽の福を享くるあたはず

百卅九—四十一【人々】黃金時代をうたへる詩人等、特にオギヂオを指す（メタモルフオシ一二）

【バルナーゾ】詩神の山（淨、廿二の六。十四—十六参照）バルナーゾの夢は詩人の想像を指す

百四十二—四【人】原文、人の根。即始祖アダモ、エーヴ 未だ罪を犯さずして樂園に住めるをいふ

オギヂオ曰。此頃（黃金時代）人律法によらず、自ら求めて信と正義を行へり

【春】オギヂオ曰。こゝにとこしへの 春ありき…地は耕やさずして 穡の實を生じたり

【ネツタレ】神々の飲料

オギヂオ曰。この時乳の川、ネツタレの川流る

第二十九曲

ダンテ對岸のマテルダとともに流に溯りてすゝみ、寺院の勝利を象どれる一の奇しき行列を見る

一—三【罪を】咎をゆるされ罪をおほはるゝ者は福なり（詩篇三二の一）

四—六【ニンフア】山川林野等に住む一種の女神。林の木蔭を歩むをもてその習となせし傳說中のニンフアの如く 行歩ふとやかに優なるをいへり

七—九【さかのぼりて】右即南方に

十—十二【岸】レーテの兩岸ともに左にまがれるなり

十九—廿一【現はるゝごとく】忽ち現はれ忽ち消ゆ

廿二—四【エーヴ】蛇に誘はれて禁斷の木の實をくらひしため夫アダモと共に樂園を逐はる（淨、八の九十七—九參照）

廿五—七【被物】服從。或は曰、無知と（創世記三の五—六參照）

廿八—卅　エーヴ禁斷の果を食はざりせば樂園ながく人類の住む處となりて我もわが生れし日より死ぬる日にいたるまでかゝる禍をうくるをえしものを

卅一—三【樂の初穗】天上無窮の福を果實にたとふれば地上の樂園の美觀はその初物にあたる

【いよ〳〵大なる喜】ベアトリーチエにあふこと（淨、六の四十六—八及廿七の百卅六—八參照）

卅七—四十二　詩神ムーゼを呼びてその助を乞へり

【處女等】ムーゼ

【汝等のために】詩を愛するあまりに

【エリコナ】ベオチア（希）の山にてムーゼのとゞまるところ。アガニツペ及イツポクレーネの泉ありて詩神等にさゝげらる

【ウラーニア】ムーゼの一にて天の事を司どる

四十六—八　類似の物遠距離にあるときはその差別を沒するがゆゑに視覺を欺きて燭臺をも黃金の木と思はしむれど近距離にあるときは個々の差別性を現すがゆゑにまかすることなし

四十九—五十一【力】認識の力

【オザンナ】（救ひたまへの義）神を讃美する詞（馬太傳廿一の九等）

五十二—四　燭臺のこと默示錄による、七の燈は神の七の靈なり（默示錄四の五）、聖靈の七の賜とゝりいづ（七十三以下參照）

五十五—七　靈界の奧義は理性（ギルジリオ）の解し能はざるところなるをいへり（淨、廿七の百廿七—九參照）

六十四—六【民】廿四人の長老（八十七以下）

七十三—五【流るゝ小旗】tratti pennelli　七の燭臺の光その餘光を空に殘して七色の線を現出せるさまあたかも細長き七の旗のごとし

或は之を「運ぶ繪筆」と解する人あり

七十六—八【日の弓】虹

【デリア】ヂアーナ（月）の異名、その帶は月暈

七色の線は聖靈の七の賜即智惠、聰明、謀略、剛氣、智識、敬虔、及敬畏をあらはす（「コンヂオ」四、廿一の百〇五以下參照）

八十二—四【廿四人の長老】默示錄（四の四）に曰、寶座の上には二十四人の長老白き衣を着頭に黃金の冠を戴きて坐せりと。廿四人の長老は舊約全書廿四卷を代表す、但その分類につきては註釋者の說一ならず

【百合の花】その敎義の醇なるをあらはす

八十五—七【アダモの女子】女。天使ガブリエレ及エリザベッタが聖母マリアを祝して、汝は女の中の福なる者なりといへること路加傳に見ゆ（一の廿八及四十二）、かの長老等また聖母を祝してかくうたひ且その美をほめたゝへしなり

九十一—三【光光に】一の星他の星に從つて動くがごとく

【四の生物】新約全書中の四福音書を代表す、綠葉の冠は希望をあらはす

九十四—六【翼】六の翼は福音の世に傳播することはやきを表はし多くの目は福音の眞理のよく一切の事物を洞察するをあらはす。但異說多し

【アルゴ】神話、ジユノネ神の命によりてイオ（ジオヂ神の墓へるニンフア）を守れる者、頭に百の眼あり、此者メルクリオに殺されし後ジユノネその眼をとりて孔雀の尾の飾となせり（メタモルフオゼ一の五百六十八以下）

【生命あらば】孔雀の尾の珠斑は死せるアルゴの目なれども、この生物の翼の目は生くるアルゴの目の如し

百—百〇二【エゼキエレ】以西結書（一の四以下）

百〇三—五【ジヨヴンニ】默示錄の作者とし

て。以西結書一の六には四の生物各四の翼ありといひ、默示錄四の八には各六の翼ありといふ

百〇六—八【凱旋車】寺院の象徴。但その兩輪の寓意明かならず、多くの註釋者之を新舊兩約の輪と解す

【グリフオネ】想像の動物、頭及翼は鷲にして其他は獅子なり、基督を代表す、即鷲の天に翔り獅子の地に走るごとく基督の神人兩性を兼備ふるをあらはせるなり

百〇九—十一　七線即七の燭臺の後に流るゝ七の光の中、中央なるはグリフオネの兩翼の間を過ぎ三線はその左を三線はその右を過ぐ

百十二—四【黃金】神性のゑるし

【紅まじれる白】人性のゑるし。雅歌五の十—十一に曰、わが愛する者は白く且紅にして萬人の長なりその頭は精金のごとし

百十五—七　スシビオネ・アフリカーノ（有名なる羅馬の大將）もチエーザレ・アウグスト（羅馬皇帝）もかく美しき車を用ゐて羅馬に凱旋を祝せしことなし

【日の車】太陽の火車

百十八—廿　フエトンテがかの火車をめぐらせしときのこと（地、十七の百〇六以下並註參照）

【テルラ】テルラ（即地）が火焰になやみその滅亡を免かれんためジオヱ神に祈願をさゝげしをいふ、この祈オヰヂオの「メタモルフオシ」二の二百七十八以下にいづ

【奇しき罰】人の借上を戒めんとてくだせる罰

百廿一—三【みたりの淑女】教理の三德即愛（赤）、望（綠）、信（白）

百廿七—九　或時は愛と望とも に信に導かれ、或時は信と望とも に愛に みちびかる、されど望は愛または信仰より生るゝものなれば他の二德を導くあたはず

【その】白或は赤の

百卅—卅二【よたりの淑女】四大德即思慮、公義、剛氣、節制の象徴。紫の衣はその高貴なるをあらはす

【三の目あるもの】思慮。その三の目にて過去現在及未來を見る、思慮は他の三德の本なればこの一圖をみちびくなり

百卅三—五【ふたりの翁】使徒行傳と保羅（パオロ）の諸書とをその作者によりてあらはせるなり

百卅六—八【ひとり】使徒行傳の作者なる醫師ルーカ（書羅西書四の十四參照）

【自然が】イツポクラテは自然がその最愛の生物即人間の生命を救はんために造り出せる名醫（地、四の百卅九—四十四並註參照）なればかくいへり

百卅九—四十一【またひとり】保羅。靈の劍（以弗所書六の十七參照）をとりて信仰のために戰へるをあらはす

【反する思】醫師は癒さんことを思ひ武人は擊たんことを思ふ

百四十二—四【よたりの者】雅各書、彼得書、約翰書、猶太書。此等の諸書は他に比して小なれば外見劣るといへり

【翁】默示錄。新約全書の卷末にありて他に類なき書なればたゞひとりといへり、眠れるはその著者の異象を見しさまをあらはし、氣色鋭きは未來を洞察する意氣の鋭きをあらはす

百四十五—七【第一の組】前列なる廿四人の長老

【花圈】brolo 薔薇（しやうび）の義

百四十八—五十【薔薇と】紅の色は新約の諸書に滿つる愛の甚强きをあらはす

百五十四【旌】燭臺とそのうしろの光以上寺院の行列について叙せしところは、寺院が悔改めし者を求め喜びて之に就くを示せり（路加傳十五の四以下參照）

第三十曲

行列とゞまれるとき天使の散らせる花の中にベアトリーチエあらはれいで（ヂルジリオ去る）車の左の緣に立ちてダンテの罪過を叱責す

一—三【第一天の七星】七の燭臺。之を第一天（即エムピレオの天）の七星といへるは我世界より見ゆる北斗七星に對してなり、七の燭臺は神の七の靈なり（淨、廿九の五十二—四註參照）

【出沒を知らず】神の靈の常に輝やきて善人の目に映ずるをいふ

【罪よりほかの】たゞ罪あるもの神の靈を見るをえず

四—六　七の燭臺のかの行列を導けること恰も我七星の舟子を導いて舟の方向をあやまらしめざるに似たり

【低き】　エムピレオの天は星宿の天（第八天）より高ければ

七—九【眞の民】廿四人の長老即舊約廿四書【已が平和に】舊約の望は基督によりて寺院を建設するにあり、故に寺院をうるに及びて望達し心安んず

十—十二【新婦よ】雅歌四の八にあり、羅典譯の聖書には「來れリベーノより、わが新婦よ、來れリバーノより、來れ いざ」といひ、來れ（veni）の語を三たびくりかへせり。長老の一、神の使命を果さんとする者の如くかく歌ひてベアトリーチエを呼べるなり

十三—五　最後の審判の日、すべて救はるゝ者獄の聲をきゝて再び肉の衣をまとひアレルイア（默示錄十九の一參照）をうたひつゝその墓より起出るごとく

【ふたゝび】再び得たる肉體の聲にてアレルイアをうたひつゝ

異本、再び着たる肉の衣かろらかに

十六—八【車】hasterna　美しく飾れる車

【永遠の生命の僕と使者】神の僕と使者即天使

十九—廿一【來る】基督聖都に入りたまへるとき群集のよろこびてさけべる詞（馬太傳廿一の九等）。天使等ベアトリーチエの來らんとするをよろこびてかくいへり

【百合を】*Manibus o date lilia plenis!*「ヰーネアの歌」六の八百八十三にいづる アンキーゼの詞にたゞoの一語を加へしのみ

廿五—七　太陽朝霧に蔽はれていでその光劇しからざるがゆゑに人ながく之に目をとむるをうるなり

廿一—三　橄欖は智惠と平和のしるし、白は信、綠は望、赤は愛

廿四—六【かく久しく】千二百九十年ベアトリーチエの死せしよりこの方十年の間ダンテはかの女を見ざりしなり

【彼の前にて】ダンテが驚異の目をもてベアトリーチエをみ、深き印象をうけて身を震はせしこと「新生」の處々にいづ

卅七—九【目の】面帕にかくれてベアトリーチエの顏あきらかにみえざりしなり（六十七—九行）

四十—四十五【童の時過ぎざるさきに】九歲の時（地、二の七十一—二註參照）

四十六—八【焰】愛。「エーネアの歌」四の廿三に「昔の焰のあとを、我今知る」といへるダドネの詞をとれるなり

五十二—四　樂園に於ける一切の歡樂もわが涙（ギルジリオの去れるを悲しむ）をとゞむるをえざりき

【昔の母】エーヴ（淨、廿九の廿二以下參照）

【露に淨められ】ギルジリオがカトネの命に從ひ草の露をもてダンテの顏を淨めしこと（淨、一百廿一以下參照）

五十五—七　ベアトリーチエの詞

【ほかの劔に】ダンテを責むるベアトリーチエの言に

五十八—六十六【己が名】神曲中ダンテの名の見ゆるはたゞこの處のみ

六十七—九【ミネルヴの木葉】橄欖。ミネルヴ神がはじめて地より橄欖を生ぜしめしこと神話に見ゆ

七十三—五【汝は人が】汝は福を享くるに足る人のみこの山に來るをうるを知らざりしか

八十二—四【主よわが望は】詩篇第卅一篇を一節より八節まで歌へるなり、羅典經にては第

八節 pédes meos（わが足を）に終る、天使等之をうたひダンテに代りてベアトリーチエに答へ、彼にダンテの主を待ち望めるを告げしなり

八十五—七【スキアヂーニアの風】東北の風。スキアヂーニアは墺匈國の南部の國の名

【伊太利の背】アペンニノ山脈

【生くる梁木】森の樹木

八十八—九十【陰を失ふ國】亞非利加。日光直下して陰なき時あり

【己の内に】上層の雪南風に溶けて下層に沈み入るをいふ

九十一—三【とこしへの球の調】諸天の調（天、一の七十六以下參照）

九十七—九【氷】憂

【息と水】歎息と涙

百—百〇二【慈悲深き】pie 天使の敬虔にして慈悲あるをあらはせる語

百〇三—五 汝等神の永遠の光の中に常に目きめて萬の事を視、夜と眠に妨げらるゝ間なければ人の世に行はるゝほどの事一として汝等の目より洩るゝはなし

百〇六—八 汝等悉く世人の行爲を知るがゆゑにわが答は汝等の知らざることを汝等に告げんがためになさるゝにあらず、ダンテをしてよくわが詞をさとらせその罪の大なるに應じてその悔を大ならしめんがためなり

百〇九—十一【諸天】原文、大なる輪。諸天が自然にその力を人に及ぼしよき星の下に生れし者を善にむかはせあしき星の下に生れし者を惡にむかはしむるをいふ

百十二—四【その雨の】神の惠の雨人に降れどその降る次第にいたりては人智何ぞ之をきはむるをえむ

百十五—七【生命の新たなるころ】若き時

【すべての良き】天賦の才能をみちびいて若き時の期待に背かざる効果をあぐるをうべかりしに

百廿一—三【ふばらく】ダンテがベアトリーチエを初めて知りし時よりこの方この戀人の死にいたるまで

百廿四—六【第二の齡】人生に四期あり、第一期は Adolescenza（發育時代）といひて廿五歲に終り第二期は Gioventute（壯年時代）といひて四十五歲に終る（「コンヴィヴィオ」四、廿四の一以下參照）ベアトリーチエの死せるはその廿五歲のはじめなれば即ち人生第二期の關にいたりて一時の生を永遠の生に變へしなり

【他人】他の婦人。地上の事に專らにして天上の事に遠ざかれる意を寓す

百卅三—五【默示】神の。ベアトリーチエがダンテの異象の中にあらはれしこと「新生」四十にその例あり

百卅六—八 ダンテを正路に呼戻し罪の中より救ふの道はたゞ恐ろしき惡の報をまのあたり彼に示してその改悔をうながすにあるのみ

百卅九—四十一【死者の門】罰をうくる者の門即地獄の門。ベアトリーチエがリムボにくだりてギルジリオにダンテの救を托せしこと地、二の五十二以下にいづ

百四十二—五 人若し悔改めずしてその罪を忘るゝをうべくば神の律法は廢らむ

【その水を】原文、かゝる食物。レーテの水には罪を忘れしむる力あり（淨、廿八の百廿七以下參照）

第三十一曲

己が罪過を懺悔して後ダンテマテルダにたすけられてレーテの流を渡りその水を飲みて彼岸にいたれば諸德彼を導いてベアトリーチエの前に立たしめかつ之に請ひてその面帕を脫せしむ

一—六【刃さへ利しとみえし】間接に（即ちベアトリーチエがダンテの罪過について天使にいへる言を）きゝてさへ劇しとおもはれし

七—九【官】喉と口

十—十二【悲しき記憶】汝未だレーテの水を

飲まざるがゆゑに汝の罪過を忘るゝ筈なし

十三—五【目を】辭甚弱きがために唇の動くさまをみて判ぜざればさとりがたき

【シ】si（然り）責められしことの眞なるをいへる語

十九—廿一【重荷】恐と怖の

廿二—四【幸】至上の幸即神

【わが願】わが汝の心の中に起さしめし善き願

廿五—七【堀】原文、横の堀（路を遮ぎる堀）カーシーニ曰。堀と鎧とは消極積極二種の障礙なり、一は心の弱みより生じ一は世の誘よりいづ、ベアトリーチェに對するダンテの愛の冷却のごときは前者に屬し、濁れる愛、肉の快樂のごときは後者に屬すと

廿八—卅【他の】世上の

卅七—九【士師】神

四十—四十二【我等の】天の

【輪】圓形の砥石をいふ、逆轉して刃にむかへば切鈍りてその切味劣るごとく神の正義の劍慈悲のために鈍るなり

四十三—五【今】異本、尙深く

【シレーナ】シレーナ（淨、十九の十九、廿一註參照）の複數。その歌を聞くは世の快樂の誘にあふなり

四十六—八【涙の種】心のみだれ

【葬られたるわが肉の】わが死の

【異なる】正しき

五十五—七　げに汝はわが死によりて世の無常を觀じ、永遠の生を享くる わが靈を慕ひて向上すべく

【第一の矢】ベアトリーチェの死はダンテが世上の物よりうけし最初の矢即ほろぶる肉の美のたのむにたらざることを知れる、心の最初の疵なりしなり

五十八—六十　なほも地上の幸を求め虛浮の快樂に欺かれて再び心に疵をうくべきにあらざりき

六十一—三【羽あるものゝ】箴言一の十七に曰、すべて鳥の眼の前にて網を張るは いたづらなり

六十七—九【翼】童ならざる汝の顏（五十三註參照）

【見て】わが天上の美を見て、汝が之を地上の幸に代へしを悔い

七十—七十二【ヤルバの國】ヤルバ王の治めし國即リビア。この吹く風は亞非利加地方より吹く南の風をいひ、本土の風即北の方歐州より吹く北の風に對せしむ

七十三—五【頭を】木の容易に倒れざるを、ダンテが恥ぢて容易に額を上げえざるにたとへしなり

七十六—八【はじめて造られし者】天使。ぷりかくるは花をベアトリーチェにふりかくること

七十九—八十一【獸】グリフオネ。鷲と獅子とによりて神人の兩性をあらはせるもの（淨、廿九の百〇六、一八註參照）

八十五—七【すべてのもの】すべての僞の快樂

八十八—九十【者】ベアトリーチェ

九十一—三【我心】人我を失ふ時は其心の作用皆内に潛みてあらはれず、このはたらき外にあらはれ諸官を活かしむるに及びてはじめて我にかへるなり

【淑女】マテルダ（淨、廿八の卅七以下參照）

九十七—九【汝我に】羅典經に「汝我にヒソポを注ぎたまふべし」といへる詩篇五十一の七の詞。僧が改悔者に淨水をそゝぎてその罪をきよむるときこの歌をうたへりといふ

百〇三—五【よたり】四大德の象徵なる（淨、廿九の百卅一卅二並註參照）。腕にて蔽ふは各その德によりてダンテを護るなり

百〇六—八【ニンフア】淨、廿九の四—六並註參照

【星】淨、一の廿二—四並註參照

【まだ世に】世に生れざりしさき。「新生」廿六の四十三—四に曰、彼は一の奇蹟を示さんとて天より地に降れるものゝ如く見ゆ

【侍女】寺院の建設未だ成らざる時にあたりてこの四德は神意に基き既に神學のために世に道を備ふるものとなれるなり

百〇九—十一【悅の光】ベアトリーチェの目の中なる悅の光を充分に見ることをえんため

【みたり】敎理の三德を代表するみたりの淑女

百廿一—廿九の下）。人かの四德に導かれて神學に到るを得、されどその堂に入ることは神を知ることさらに深きこの三德の力を借るにあらざれば能はず

百十五—七【緣の珠】ベアトリーチェの目

百廿一—三　神としての基督人としての基督がこもゞ〳〵神學の目に映ずるを叙す

【忽彼忽此】或は鷲（神性）或は獅子（人性）の恣態（顯現）

百廿七—九【食物】ベアトリーチェの目を見ること

百廿—廿二【さらにすぐれ】さきのよたりの淑女にまさりて

百廿三—八【第二の美】口。第一の美は目にして第二の美は口にあらはるゝうるはしき微笑なり（コンヴィヴィオ三、八の六十四以下參照）

百廿九—四十五　みたりの淑女の請を容れて面帕をぬぎ去れるベアトリーチェの姿の美しさ尊さはいかなる詩人の筆といへども叙するにふさはしからざるをいへり

【バルナーゾ】淨、廿二の六十四—六參照

【あをざめ】詩の研究につかれて

【飲みたる者】詩想のゆたかなる者

【調をあはせ】運行の諸天相和してその自然の調亂れざること。但この一行の解釋につきては異說多し

第三十二曲

ダンテ目を轉じてかの聖なる行列の東に歸るを見マテルダ及スターチオと共に之に從ひ一奇樹のほとりにいたりて眠り眠さめし後象徵

によりて寺院の多くの變遷を見る

一—三【十年の渴】ベアトリーチェを見んとおもへる十年の間（千二百九十年即ベアトリーチェの死せる年より千三百年まで）の切なる願

四—六【等閑の壁】ベアトリーチェを見るに專らにして他の事物をすべて等閑に附するをいふ

【微笑】ベアトリーチェの第二の美（淨、廿一の百卅三—八並註參照）

【昔の網】昔の愛の力

七—九【女神等】車の右ダンテの左に立てる敎理の三德

十三—五【小さき】行列の光の如き小さき

【大なる】ベアトリーチェの顏の光の

十六—八【榮光の戰士等】行列

【日】四月十三日の午前の日光。これと七の燭臺より出る光を顏にうけつゝ東にむかひてかへりゆくなり

十九—廿一　長き列を成せる一隊の兵その方向を變ずる時は後列未だ動かざるまに前列既に旗を先立てゝ轉換す

廿二—四【王國の軍人】廿四人の長老

廿五—七【淑女等】ダンテを導かんとて車の左を去れるよたりの淑女も、またダンテのためにベアトリーチェに請はんとてやゝ先に進めるみたりの淑女も

【荷】凱旋車

廿八—卅【輪】車の右の輪、車右に方向を轉ずるがゆゑに車轍の弓の形左の輪に比すれば小さし

卅一—三【女】蛇に欺かれて禁斷の果を食へるエーヴ（淨、廿九の廿三以下參照）

卅七—九【アダモ】エーヴに勸められて神命に背けるアダモの罪（創世記三の六以下）を責め且そのためになげくなり

【一本の木】善惡を知るの木（創世記二の九）。神此木を樂園に生ぜしめ且その果實を採るを禁じて人の服從を求めたまひしものなればこゝには服從の象徵として人類の罪及基督の救をあらはせるなる

ゞし、但異說多し、今多く古註によれり

【花も葉もなき】神の律法がその積極的効果を失へるをいふ

ブーチ曰。人かく神の命に背きてその恩寵を失へるがゆゑに能く善を行ひて以て聖旨を和ぐるをえず、基督來臨したまふに及びその從順の德によりて神人はじめて融和すと

四十—四十二【髮】枝。從順の德は神に近づくに從て增すなり

【印度人】印度の森には亭々たる巨木ありて矢もその頂に達せずといふことギルジリオの「ゼオルジカ」二の百廿二以下にいづ

四十三—五　アダモの罪を責むると同時に基督の從順を讃めしなり

四十六—八【すべての義の】ブーチ曰。慢心は衆惡の母謙讓は諸德の本なり、ふかして謙讓はたゞ從順によりて保たると

四十九—五十一　グリフオネがかの大樹の枝をもて凱旋車の轅をその幹に結べるは、基督が

從順の例を示して寺院に此德を敎へしことをあらはす

【その小枝をもて】或は quel di lei を「それ（かの木）にて作れるもの（即轅、轅を十字架の表章と見做し、基督の十字架は智識の木にて作られたりとの傳說によれり）を」と解する人あり

五十二—四　春來れば地上の植物（その芽を出し）

【大なる光】太陽の光

【天上の魚】雙魚宮の星。その後に輝くは白羊宮の星なり（地、十一の百十二—四註參照）、こゝには春太陽の光が白羊宮の星の光とまじりて地上に降るときをいふ

原語 lasca は淡水に住む魚の一種

五十五—七【日が】太陽白羊宮の後なる金牛宮に移りてその日毎の廻轉を續けざるまに。太陽の金牛宮に入るは四月の下旬なり

五十八—六十　基督の模範によりて寺院從順の德を傳へ、神の律法その失へる効果を克復するにいたりしこと

【薔薇より】薔薇と薔の中間の色、但其何色なるや（ムーアは、薔薇の如く赤からざれども菫よりは赤勝てる意なるべしといへり）將又之に特殊の寓意ありやあきらかならず

六十一—三【終まで】歌をきゝつゝ眠りたれは

六十四—九【目】アルゴの百眼（淨、廿九の九十。四—六並註參照）。アルゴの守きびしきを見てジオヱ神その戀人イオに近づくあたはざるを怨み メルクリオを遣はしてアルゴを殺さしむ

【高き價を拂へる】生命を失ふにいたれる

【シリンガ】パーネ神に慕はれしニンフアシリンガ。メルクリオ神この物語（メタモルフオシ一の六百八十九以下）をもてアルゴを眠らしめその類を擊ちて之を殺せり

七十—七十二【煌】天に登る行列の光

【羣】マテルダの

七十三—五【林檎】基督。雅歌二の三に曰。男子等の中にわが愛する者のあるは林の樹の中に林檎のあるがごとし

【花】變容（馬太傳十七の一—八）によりてあらはれし基督の榮光

【果】天上に於ける基督の榮光。花の果に於ける如く、基督の變容はたゞその榮光の一部の顯現即全榮光の一約束に過ぎず

【婚筵】（默示錄十九の七—九）、基督がその榮光によりてかぎりなく聖徒を福ならしむること

七十六—八【導かれて】基督に導かれて高山に登り（馬太傳十七の一）

【氣を失ひ】光と聲とにおどろきて（馬太傳十七の六）

【さらに大なる睡】死の睡。基督の言によりて死者の蘇へれることあるを指す（路加傳七の十一以下、約翰傳十一の一以下等）

【言葉】起きよ恐るゝ勿れといひたまへる基督の言葉（馬太傳十七の七）

七十九—八十一【變りたる】常の如くになれる

八十八—九十【組】七淑女。基督（グリフォネ）天に昇りて後、神學（ベアトリーチエ）は諸德（七淑女）にかこまれて寺院（車）を護る

九十四—六【眞の地】terra vera 眞實にして神に從順なる地の謂か、或は曰ふ、席を設けざる裸の地の意と

九十七—九【光】七の燭臺

百—百〇二　汝が地上の人として此樂園にとゞまるはたゞ束ばしの間のみ、その時過ぐれば天に登りてかぎりなくかしこに住まむ

【羅馬】天の都。基督もその民のひとりなり

百〇九—十一　高き密雲の中より電光の射下する早しといへども。註釋者曰、雨雲高處にあるときは當時の所謂火炎界に近きがゆゑにその影響をうけて電雷常よりも劇しき意と

百十二—四【ジオヴの鳥】鷲

鷲は羅馬帝國の徽章なれば、鷲が智識の木を荒せるは羅馬皇帝等（ネロネ、ヂオクレチアーノ等）が神の律法をなみせるをいひ、その聖車を打てるは彼等が寺院を迫害せるをいふ

百十八—廿【狐】迫害に次ぎて起れる異端。良き食物は健全なる教義

百廿一—三　正しき教（ベアトリーチエ）に逐はれて異端寺院を去れるなり

百廿四—六　鷲は皇帝、羽は世の利慾なり。即ち皇帝コスタンチーノが法王シルヴェストロ第一世に領地を供物として捧げしこと（地獄十九の百十五—七並註參照）

百廿七—九【小舟】寺院を指す

百卅—卅五　龍は即宗爭にしてその車底の一部を奪へるは寺院の相分離せる（希臘寺院の羅典寺院よりわかれしごとく）をいへるか、詩人の眞意分明ならず、異說或はマオメットとし或は魔王とす

百卅六—四十一　殘れる物即底の一部を失へる車の羽をもておほはれしはその後の皇帝等の供物によりて寺院の所得忽ち膨脹せることを表はす

【おそらくは】彼等或は眞に寺院の益をおもひてかく供物を捧げしならむもその結果としてはたゞ寺院の腐敗を招くに過ぎざりしなり

百四十二—七　寺院富を得ていよ〳〵利慾に迷ひ腐敗を極むるにいたれるをいふ

註釋者曰。七の頭は七の罪なり、七の罪の中、誇と嫉と怒とは神と人とに對しての罪なればこれに各二本の角あり、他の四の罪はたゞ人に對して行はるべき罪なればこれに各一本の角あるなりと

此項は地、十九の百〇六以下に見ゆる水上の女と同じく默示錄よりいでゝ意は異なれり、讀者よく思ふべし

百四十八—五十【遊女】法王。法王ボニフアチオ第八世及クレメンテ第五世の頃の寺院の腐敗を叙せるなり

百五十一—三【巨人】佛王特にヒリツポ第四世。遊女と接吻せるはボニフアチオとヒリツポと初め相和せるをいふ

百五十四—六　法王ボニフアチオ第八世が佛蘭西王家の抑壓を免かれんとして却てヒリツポの虐待を受けしをいふ（淨、廿の八十五—七註註參照）

【我に】古註に曰、ダンテはこゝに基督教徒を代表し、寺院が基督教徒に助を求めしをあらはせるなりと

百五十七—六十　クレメンテ法王たりし時法王の廳羅馬より佛のアヴニオンに移されしをいふ

【盾】林盾の如く目を遮りて

【獸】即異形の車

第三十三曲

ベアトリーチエ、マテルダ、スターチオとともにダンテかの奇樹のもとを離れ、ゆく〳〵ベアトリーチエより、近く故國に起るべき事及其他の數をきゝ、遂にエウノエのほとりに達し、こゝにてマテルダにたすけられてその水を飲み、天に登るをうるにいたる

一—三【神よ】*Deus, venerunt gentes*「あゝ神よ、異邦人は汝の境に入來り、汝の聖なる殿を汚し、ゼルサレムメを荒地となせり」といふ詩篇第七十九篇第一節の始の詞。みたりの淑女（教理の三德）よたりの淑女（四大德）と次ぎ〳〵にこの歌をうたひて寺院の頽敗を嘆きたるなり

四—六【マリア】聖母マリアが十字架上の基督を見て哀にたへざりしごとく、ベアトリーチエは寺院の非運をいたみおもひてその顏色を變へしなり

七—九　淑女等うたひをはれるときベアトリーチエはその熱烈の情を面にあらはし

十—十二【少時せば】基督の言（約翰傳十六の十六）。寺院の腐敗によりて靈界の智識一時ひそみかくるゝとも久しからずしてまた顯はるべしといひ、寺院の改善を豫言せるなり

十三—五　七淑女を前に立たしめ、ダンテとマテルダとスターチオとを身振に示して後に立たしめ

廿五—七【犀を齊ふる】原文、犀を完全に齒までひきいだす

廿八—卅【汝は】わが問を待たずして汝は我に必要なるものと此必要に應じて我に教ふべきことゝを知る

卅四—六　かの龍のために底を奪はれし飄旋車は今や遠く移されてこゝにあらず、されどこれを移せる巨人は神の刑罰必ずその上に臨むを知るべし

【スッペ】suppe　酒またはその他の液體に浸せる麪包

註釋者曰。昔ヒレンツエの習俗として、人を殺せる者若し兇行の當日より九日の間に於て被害者の墓にゆき、酒に浸せるパンをこゝに食ふときは、死者の遺族復讐をなすことあたはず、故に遺族等九日の間墓を護りて殺害者のこゝに入來るを防ぐを例とせりと。こゝにてはいかなる方法を用ゐるとも神の刑罰の避けうべきにあらざるをいへるなり

卅七—九【羽を】淨、卅二の百廿四—六參照

【獲物】巨人の（淨、卅二の百五十一以下參照）

【鷲】即皇帝。世繼なきは帝位の空しきをいふ

フエデリーゴ第二世の死よりアルリーゴ第七世の即位まで（一二五〇—一三〇八年）帝位空しきにあらざりしも名實相そはざるがゆゑに（淨、六の九十七以下參照）ダンテはフエデリーゴを指して最後の羅馬皇帝といへり（コンザオオ三の百八以下）

四十—四十二【妨碍障礙】世に及ぼす星の影響をさまたぐるもの

四十三—五【五百と十と五】註釋者曰。五百と十と五はDXVなり、少しくその位置を變ずればDVX（即羅典語にて導者、首領の義）となる、偉人出でゝ世の改善をはかるの意と、但異說多し、また偉人とは何人を指していへるものなるや不明なり

ムーア博士は此偉人を以てアルリーゴ第七世に外ならずとしArrig (o, or E) oより希伯來文字の計算法によりて五百十五の數を得べき一の新しき試をなせり（メンテ論究第三卷二百五十三頁以下）、ベアトリーチエの此豫言をばアルリーゴ第七世に對するダンテの望をあらはせるものと見做すべき多くの理由あれどもダンテが果して其名をかく數字の上に現はさんとしたりしや疑はし

【盜人】遊女即法王。法王の位を奪へるによりてかくいふ（地、十九の五十二以下參照）

四十六—八【テミーデ】神話、ウラーノ神と地の間の女にして神詭を以て名高し

【スヒンゼ】女面獸身の怪物、テーベの附近に住み謎を以て旅客をなやませるもの

四十九—五十一　事實は遠かに汝をしてわが此豫言の眞義をさとるをえせしむべし

【ナイアーデ】泉の女神

スヒンゼの謎を解けるはナイアーデにあらずしてライアーデ（ライオの子、即テーベ王エーヂポ）なり、こは謄寫の誤よりオヰヂオの「メタモルフオシ」（七の七百五十九）にナイアーデとな

りゐたるがダンテの時代にいたりてもなほいまだ訂正せられざりきといふ

【損害】スピンゼ謎を解かれて死するやテミーデ之がために讎を報いんとて怪獣を放ち、テーベ人の畜類及田野に損害を與ふ（「メダモルフオシ」七の七百六十二以下參照）

五十五—七【二度】最初はアダモに次は驚に

五十八—六十【己のためにとて】神の大權の表章として

六十一—三　禁斷の果實を食へるため、人類の始祖アダモは基督（即十字架上に死してアダモの罪を贖ひたまへる）の降臨を望み待ちつゝ、神を見るをえざる苦と神を見るをうるの願の中に五千年餘の歳月を經たり

【五千年餘】地上にあること九百三十年（創世記、五の五）、リムボにあること四千三百〇二年（天、廿六の百十八以下）

六十四—六【うらがへる】淨、卅二の四十—四十二並註參照

六十七—九　諸の空しき思によりて汝の心かたくなになり、かゝる思より生ずる樂によりて汝の智暗むことなかりせば

【エルザ】アルノの支流。その水多くの礦分を含みてよく物の上層を化石すといふ

【ビラーモ】ビラーモの血に桑の染みしごとく（淨、廿七の百七九並註參照）汝の智かゝる樂に染まずば

七十—七十二【多くの事柄】汝のふたしく見し種々の出來事

七十三—八【書さゞるも】智暗みてわが言をあきらかに心に書きふるす能はずとも少なくもその形をとゞめて

【巡禮】聖地に旅する巡禮等その記念として棕櫚にて卷ける杖を携へ歸る如く汝も此地歴程の記念としてわが言を携へ歸れ

八十五—七【學べるところ】世の學問のいかなるものなるやを自ら知りてその教のわが教に遠ざかるを見

八十八—九十【天】第九の天即ブリーモ・モービレ。（以東亞卷五十五の九參照）

九十七—九　レーテの水を飲むは過去の罪を忘るゝためなり、罪を忘るゝはわするべき罪ある證なり

【他に移りし】天上の教を棄てゝ世上の教を求め、聖道を離れて世道を踏めること

百—百〇二　我今より後わが言葉を明瞭にして汝にさとり易からしめむ。粗き目は不充分なるさとりの力

百〇三—五【いよ〳〵】正午の太陽は光珠に強く迴轉珠におそしとみゆ

【亭午の圈】子午線

【見る處の】正午即太陽の過ぐる子午線の位置は經度の異なるに從つて異なる意か

百〇九—十一【仄闇き蔭】林の

百十二—四【エウフラーテとチーグリ】エデンの園よりいづる四の川の中第四と第三の川の名（創世記二の十以下）

百十八—廿三【人の如く】速かに

【告げたり】淨、廿八の八十八以下

百廿四—六　他に強く心を惹くものあれば人屢記憶の力を失ふ、思ふに彼ダンテもまたかゝるもの（ベアトリーチェの委及その詞、木と肇に關する種々の不思議なる現象等）の爲に汝が先に教へし事を今思ひ出る能はざるならむ

百廿七—九【エウノエ】Eunoe善事を記憶せしむる川にて（淨、廿八の百七以下參照）その名とともにダンテの創意にいづ

【力】己が善行を憶ひ起す力

百卅—卅二　心たふとくやさしき人は他人の願、言語または舉動によりて外部にあらはるれば言に托せてその願を辭まず、直ちにこれを己が願とひとしうす

百卅九—四十一【第二の歌】淨火篇

【技巧の手綱】技巧の法則即作品各部の間の調和に制限せられて、さらに章を重ぬるをえず

神曲の各篇曲數相同じく（地獄篇の第一曲は神曲全部の總序なり）その句數亦略相同じ

正誤

本文

頁	行	誤	正
二	八	ふせる	ふうせる
三	七	同ふせる	同うせる
一一	十	憶して	臆して
三三	三	ブルトー	ブルート
四二	八	ことなきかれは	ことなきこの者
四五	三	幸さき	幸なき
五二	十	きしかた	來しこた
六四	二	贈	贈
六五	七	胸に	前に
七〇	九	傳へ	傳ひ
七四	三、數行	百廿士	百廿七
九〇	二	目をも	目にも
九〇	四	アダチエ	アヂーゼ
一〇〇	十一	なるへし	なるべし
一〇八	八	寛かりき	寛かりき
一一三	八	古りたる	舊りたる
一一三	七、數行	百十三	百十五
一五九	五	バーコ	バーコ
一六七	七	虐	虐
一六九	三	こど〳〵く	こと〳〵く
一七二	三	大鼓	太鼓
一七二	五	汝の地	汝等の地
一八七	十一	ジウデーア	ジュデーア
一九七	二	ヴンニフッチ	ヴンニ・フッチ
一九八	五	たちまた	たちまち
二〇五	十一	妄執	妄執
二〇八	二	籍く	藉く
二二〇	八	ふたゞひ	ふたゝび
二二一	九	悔と懺悔とをもて	悔いまた自白して
二三〇	十	いかばかりぞや	いかにぞや
二三七	十	衰ひゆく	衰へゆく
二四二	一	ジウノ子	ジュノ子
二四三	十二	ジャンニ スキツキ	ジャンニ・スキツキ
二四七	三	そへて	そひて

註

頁	行	誤	正
二二	下、末行		
二八	上、下より二		
二三	上、上より九		
二三	下、上より四		
二四	下、上より四		
三〇	上、下より四		
三二	下、上より二		
三四	下、上より五—六		
三四	下、下より七		
三五	下、下より三		
三五	上、上より九		
三五	下、下より十一		
三六	下、上より十四		
三七	下、下より六		
三七	下、上より九		
三七	下、下より三		
三八	下、上より七		
三八	下、下より三		
四〇	下、下より七		
四〇	下、下より九		
四〇	上、上より十		
四〇	上、上より十二		
四〇	同 上		
四一	上、下より四		
四七	七	ジウセッペ	ジュセッペ
二五一	九	角笛	角笛
二五二	十	腕	腕
二六七	四	饑えたる	饑ゑたる
二七一	十	悲情の	非情の
二七五	十二	寢ね	寢ね
二八四	三	墓に等しき	墓の深さに等しき
		載れる	乘れる
		チ、ダンテ	チ、ダンテ
		左の妁し	左の如し
		三註	六註
		一子	一ノ
		全ふし	全うし
		ダンテの詞	地の文
		二の四十四—八十六	二、十五の四十四—八十六
		名	名不明
		ペネデット	ベネデット
		伊大利	伊太利
		「マーレブランケ」（淨、一の百卅—卅二參略）	「マーレブランケ」（淨、一の百卅—卅二參照）
		堺とする	堺とせる
		Benvennt	Benvenuti
		フランチスコ	フランチェスコ
		とふい	といふ
		勝に垂じて	勝に乘じて
		註譯者	註釋者
		大陽	太陽
		「印度より起れる」の七字を削る	蔽ふ
		蔽ひ	
		「西班牙に終る」の六字を削る	
		ジヴデッカ	ジウデッカ

『淨火』正誤

頁	行	誤	正
五五	四	「雜錄」	「雜錄」
五五	附言	たまへ	たまへる
一	六	◎願はくば	願はくは
七	一	なるべき	なるべき
一五	七	よろこび	よろこび
一七	六	刺*	刺
一九	七	プラト子	プラト子
二三	三	つぐれは（つがれば）	つぐれば（つがれば）
二八	一	上線（ラはべり）	上線（ラはべり）
二八	三	△狂	枉
二八	十一	匍匐	匍匐
五六	五	及ばし	及ばじ
四三	四	體（からだ）	體（からだ）
四四	二	仇	徒（ただ）
四六	六	諸洲	諸州
五五	一	垣	坦
五六	九	裏	裏
五八	七	候爵	侯爵
六二	十一	已が	己が
六五	十二	州	洲
六八	一	または	また
六九	十	抑ゆる	抑ふる
七一	十二	來て	來りて
七四	七	鳴器（ラつは）	鳴器（ラつは）
七七	一	敢め	納め
九一	二	擢	櫂
九三	三	危輸	危險
一〇九	九	（まへにあらず）	（まへに進まず）
一一七	十二	告く	告ぐ
一二六	二		
一二〇	九	ロムバルヂア	ロムバルヂア
一三五	七	癈	廢
一三七	九	まば〳〵	まば〳〵
一五六	十一	哀む者	哀む者
一五七	五	我等の上にてたゞひとり	唯一者（ひとり）にて我等の上なる
一六〇	四	上る（のぼる）	上る（のぼる）
一六〇	四	わか裏	わが裏
一六五	三	終らん	終へん
一六八	十二	ビグマリオ子	ビグマリオネ
一七九	九	たればなり	たればなり。
一九三	十二	茵蘓	茵蘓
一九四	五	バルバジア	バルバジア
一九九	九	教檀	教壇
二〇四	三	知る	感ずる
二〇五	五	祐	裕
二三六	十	心搆	心構
二三七	七	のぼりて	のぼりて
二五一	七	暈	曇
二五五	二	どゞく	どゞく
二七一	十一	眠れる	眠れる
二七二	十一	候爵	侯爵
二七二	下、下より四	プロット	プロット
二七二	下、下より八	uoci	voci
二七四	上、上より八	まれ	また
二七九	下、上より二	カステル	カステルロ
二七九	下、上より六	オギヂオ	オギヂオ
二七六	上、上より二	地、十の	地、十の
二七八	上、初行	了	了
二七七	下、初行	無情	非情
二八四	上、初行	後れて	後れて
二八九	下、上より八	刃	刃
四〇四	上、末行		

◎五の三。七二の三。一〇二の一
＊三九の七。五七の四。五九の三。一〇四の二。一五〇の十。一六九の三。二六三の十一。二七五の六
△四三の十。二六九の五

大正六年五月十八日印刷
大正六年五月廿一日發行
定價壹圓卅錢

不許複製

飜譯者　山川丙三郎
東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
發行者　福永文之助
東京市京橋區西紺屋町二十七番地
印刷者　佐久間衡治
東京市京橋區西紺屋町二十七番地
印刷所　秀英舍
東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
發行所　警醒社書店
（振替東京五五三　電話新橋一五八七）

コ1174

地獄篇（既刊）定價一圓廿錢 郵稅金八錢

天堂篇（續刊）定價未定

終